

玉（60～260 g）、なかでも高値のL～2 L率の高い生産法の観点では、誤った指導や理解が多い。大きさの規格歩留まりを考える場合、図5に示したように、株当たりいも数あるいは単位面積当たりいも数を考慮し、それを技術化するのが最も有利である。

畦幅は正しい培土ができる最も狭い72cmとし（おおよそ）、株間は生食用早生品種の株当たりいもの着生範囲に等しい30cmとする（おおよそ）。したがって単位面積当たりのいも数は株当たりいも数でのみ調整でき、それは株当茎数で調整する。こうすれば、収量は肥大期間で決定的であり、早生品種の適正な肥大期間は約80日である。これを充分利用すれば、10 a 収量は5.6 t に到達する。だが一般には少しでも早くL玉（120～190 g）をえようとするため、わざわざ1～2 茎株の多いは場にするという考え方と技術が多い。確かにそれは株内の選ばれたいも（早く肥大したもの）が、肥大始期後40日前後でL玉になる。それが収穫を1週間遅らすと2 L～3 Lになり、同時に変形して規格外になってしまふ。

道南から南の暖地にはこうしたは場が多く、前述したパイレシヨ作付け面積の衰退は、総

収量はとれても規格内収量が低いため、それは株当たりいも数が4～9個と10個未満であるからだといって過言ではない。

株当たり茎数を4～5本にすると、生食用早生品種の生育期間である約100日間を全うし、いもが成熟段階になって食味がよくなるばかりでなく、株当たりいも数が15～20個の範囲になり、長い肥大期間で多収になり、最大粒でも2 L（190～260 g）が1個程度で、粒ぞろいがよく、規格内収量を90%以上にすることさえ可能である。これらの点から全粒種いもの使用を推奨し、同時にM玉までの小粒種いものを生産する採種技術も指導しているのである。

〈む す び〉

M町を訪れ5年前から1歩も前進していないことに驚き、かつ残念な思いをしたが、実はそれが全国どこにもみられる。作物のもつ能力を最大に発揮させる技術の確立が、生産者の最大の喜びであり、それを引き出すのが営農指導だが力が及ばない。このままでは1年に1作しかできない大切な1年を無為に過ごすことになる。自由化や価格低迷の反対運動にかけるエネルギーを、技術向上にかけてほしいものである。

へじゃがいもと映画

○静かなる男

1953年、御存知のジョン・ウェイン主演のアメリカ映画。元ボクサーの彼がアイランドの故郷の村に帰って来たところから始まる。その日羊を追う赤毛の美女を見て一目惚れする。

彼女の家の夕食では、ゆでた200gほどのじゃがいもを配る風景が出てきた。故郷とされたこの村はタブリンの近くであった。その昔じゃがいもに頼っていたこの地方で、19世紀半ばにじゃがいも疫病というかびが原因の病気が大発生したため、ケネディやレーガン大統領の曾祖父が村を離れアメリカへと渡ったこともあった。そんな村に近かったから、じゃがいもが主食のように毎日食卓に登るの

は当然のこと。

結婚に反対する彼女の兄のもとに、マツチ・メイカーと一緒に挨拶に参上した日の夕食にもじゃがいもとミルクが出ていた。結婚した翌日も彼女は、『バラより、キャベツやポテトを植えたら』と言う。アイランドが舞台らしい映画であった。

○刑事コロンボ・指輪のあと

コロンボが育ったのは、車の修理工場に近いところを、工場をよく遊び場とした。マフラーをじゃがいもで塞ぐと、絶対にエンジンがかからない。見つかると思えるのももちろんだ。

○ピツグ

子供のセンスを持つ青年ジョシュがおもちゃ会社に入ってくる。社長の目にとまり重役になってしまふ。その重役会議のマンネリさにうんざりし、重役用の車で女スーザンと青年の家に向かうとき、その中でフレンチャイが出てくる。国によって、当然でてきてよいものがでくる。アイランドが舞台のときでくる皮つき水煮いもをフランスやアメリカに期待できない。

（浅間和夫）